

研究ノート

K. ポパー、W.I.トマス、R. マートンのリスク社会論 —バーチャル・リアリティと予言の自己成就—

有 里 典 三

- 1 はじめに
- 2 K. ポパーの「エディプス効果」とその諸類型
- 3 W. I. トマスの公理＝「状況の規定」の意味内容
- 4 R. マートンによる「予言の自己成就」の定式化
- 5 金丸由雄による予言の諸類型
- 6 社会的現実のなかで「予言の自己成就」がどのようにして起こるのか？
- 7 どのような場合に予言が影響をおよぼすのか？
- 8 リスク社会のゆらぎ——バーチャル・リアリティと予言の自己成就との関係

1 はじめに

「マルチ・メディア」と呼ばれる新しいメディアの登場によって、私たちが知覚しうる世界は自分の直接的な体験を大幅に越えるようになってきた。現在、私たちが生きている情報社会は、フィジカル空間とバーチャル空間からできている。バーチャル空間はコンピューターネットワーク上にあり、大量のサイバースペースの集合体からできている。サイバースペースとは、人間がコンピューターとインターネット上に創り出した情報空間のことで、そこでは時間や距離のような物理的な制限を取り払って自由に行動することができる。この情報空間はインターネット上に作られた、いわば人工のコミュニティあるいは社会であり、サイバースペースのなかで、一切（ヒト、モノ、動き）は情報としてとらえられ、その情報によってコントロールされている。

サイバースペースのなかに存在する様々な現象は、「バーチャル・リアリティ」(Virtual Reality, VR) である。仮想現実と訳されている。劉 (2019, 「情報科学」第6回講義資料) によると、このバーチャル・リアリティが現実と仮想を入れ替える。

現実と仮想の間にあるのは「拡張現実」(Augmented Reality, AR)¹⁾である。バーチャル・リアリティと拡張現実が融合したものを「複合現実」(Mixed Reality, MR)²⁾と呼んでいる。そこでは、もはや真実と虚偽は限りなく近づいている。劉(2019、同上)は、私たちはそうした世界、すなわち情報によってコントロールされ、リアルな世界と画面の中の仮想の世界の境界があいまいになり、現実と仮想が交じり合った世界を生活している、と現在の情報社会の危うさを指摘している。

このように真実と虚偽の境がますます曖昧になっていく社会ではどのようなことが起こるだろうか。確かに、天動説を信じた古代ギリシャ人の「誤ったイメージ」をコペルニクスは「事実」によって覆してみせた。それと同じように、事実に対して「誤ったイメージ」を抱いても、そのイメージは「事実」によって否定されると断言できるだろうか。社会現象をつぶさに分析してみると、それとは逆に、「誤ったイメージ」が「事実」を変えてしまう現象がしばしば起こっている。たとえば、流言飛語の伝搬によって1923年の9月に起こった関東大震災時の朝鮮人虐殺事件しかり。1927年の3月に当時の大蔵大臣が予算委員会で発した不用意な一言(今風にいえばフェイク・ニュース)が拡散することによって、1か月間で30以上の銀行が営業停止や連鎖倒産に追い込まれた金融恐慌しかり。あるいは、1973年の10月、第4次中東戦争に端を発する第1次オイルショックが原因で起こった「トイレットペーパーなどの物不足パニック」しかりである。

こうした過去の事例からも推測できるように、私たちが生きる情報社会とは、これまで以上にデマの拡散によって暴動や社会不安が発生しやすい、あるいは偏見と差別の連鎖が助長されやすいリスク社会といえるのではないか。以上のような問題意識から、本稿では、現実(ホント)と虚構(ウソ)のはざまでおこる意図せざる結果について、K. ポパーとW. I. トマスとR. マートンが定式化した「予言の自己成就」という概念を手掛かりに考えてみたい。

2 K. ポパーの「エディプス効果」とその諸類型

2-1 『オイディプス王』の悲劇

常識的に考えると、「誤ったイメージ」は「事実」によって否定されるのだが、実際には、「誤ったイメージ」が「事実」を変えてしまうことがしばしば起こる。社会現象においては、「誤ったイメージ」は「事実」によって否定されるのではなく、「誤ったイメージ」こそが「事実」を変えてしまうというパラドックスが発生する。ここに自然現象にはみられない社会現象だけがもつ非自明性がある。最初に、K. ポパーが、「予言するという行動がその後の行動の原因として作用する」というインプリケーションを引き出したソポクレス作の『オイディプス王』の悲劇をみておこう。以下に引用した文章は徳岡による要約文(徳岡、1987、pp.6-7)であ

るが、分かりにくい箇所については著者の手で加筆・修正している。

「ソポクレス作のギリシヤ悲劇の名作、『オイディプス王』の悲劇は、太古のギリシヤ、テバイの王ライオスが、[おのれの情欲に負け、再三にわたるアポロンの神託を無視して、] 妻イオカステとの間に一子をもうけたことにはじまる。アポロンは、『妃のイオカステとの間に男子をもうけたならば、その子の手にかかって亡き者にされるべき運命にある』という恐ろしい予言を告げていた。[この呪いは、ライオスが若い頃に、放浪の身を寄せた王家の美少年に邪恋をして、ついにこれを浚って殺してしまった罪によるものである。]

アポロンの神託を信じた父王ライオスは、[生まれたばかりの赤子の両方のくるぶしにピンを刺し通し、] キタイロンの山中深くに捨てるように牧人に命じた。[この時のくるぶしの腫れがその後も退かなかったため、『腫れた足』を意味する『オイディプス』と名付けられた。] だが、その赤子は、牧人の情を介して、コリントス王ポリュボスの養子として育てられる。[しかし、成人したオイディプスを妬んだ友人から『偽りの子』とののしられ、] 自分は養子だとの噂の真偽を確かめるべくアポロンのもとに向いてその真偽を聞いた。しかし、アポロンはその問いには答えずに、『母と交わり、それによって、人びとの正視するに堪えぬ子種をなして世に示し、あまつさえ、自分を生んだ父親の殺害者となるであろう』との、悲しくも恐ろしい予言を下したのである。[コリントス王とその妃を實の両親と信じている] オイディプスは、自分さえ父母から遠く離れてしまえば神託の告げる不祥事は達成されないと考えて、コリントスを出奔する。アポロンの予言を的中させまいとして、愛する実子の殺害を命じた父、出生の秘密を知らないオイディプスが、父親殺しとなりたくないと願って[愛情をかけて育てられたコリントスから出奔した] 行動の積み重ね、それらの[回避行動の] 結果として、皮肉にもオイディプスは、実父を殺害し実母と結婚してしまう。予言が悲劇的に実現したことを知ったオイディプスは、『こうなったのはアポロンのため』と絶叫する。」(ソポクレス / 藤沢令夫訳、1967、岩波文庫)。

2-2 K. ポパーによる「エディプス効果」の諸類型

人間界においては予言の対象となっている当事者が予言者の予言内容を信じ込み、それを考慮に入れた行動をとるために、予言するというその行動が、その後の行動の原因として作用することがしばしばある。ポパーは、オイディプス王の悲劇のインプリケーションから、予測するということが、予測された出来事の上におよぼす影響を「エディプス効果」と呼んだ(ポパー、1961、p.31)。もっとも、ポパーのいうエディプス効果の内容は、オイディプス王の悲劇のように、予測の影響が予

測された出来事を生じさせる場合ばかりではない。予測の影響が予測された出来事を阻止する場合もエディプス効果と呼ばれている。ポパーは予言が結果におよぼす影響の方向と程度は一樣ではなく様々な種類が存在するとして、次のように分類している (ポパー、同上、pp.32-34)。

- ① 予測されなかったとすればその出来事がまったく起こらなかったかもしれないのに、予測することが予測された出来事の原因となりそれを生じさせる場合【→予言の自己成就】
- ② 予測が予測された当の事象の実現を早める場合
- ③ 予測が何の影響もおよぼさない場合【→自然現象】
- ④ 予測が予測された当の事象の実現を遅らせる場合
- ⑤ 予測が原因となって予測された事象の実現を阻止する場合【→予言の自己破壊】

すなわち、①予測されなかったとすれば、その出来事がぜんぜん起こらなかったかもしれないのに、予測することが予測された出来事の原因となり、それを生ぜしめる場合であり、これがマートンの定式化した「予言の自己成就」に当たる。逆に、⑤予測が原因となって予測された内容の実現が阻止される場合は「予言の自己破壊」に相当する。いうまでもなく、①と⑤では予言が結果におよぼす影響の方向と程度は正反対である。その中間に、②予測が当の事象の実現を早める場合、④予測が当の事象の実現を遅らせる場合、が位置する。真ん中は、自然現象のように③予測が何らの影響もおよぼさない場合である。

ソポクレスが描いた『オイディプス王』のなかでは、アポロンの神託は一つの情報 (現実の写し) である。最初は現実とその情報 (現実の写し) とはまったくかわりがなさそうである。だが、離ればなれの両者がしだいに収斂していき、そして遭遇する。この遭遇に立ち会った者が経験する美的な驚き、あるいは美学的な法則にかかわる面白さこそが、ギリシャ悲劇の世界的名作として長く読者を魅了し続けてきた一因であろう。

3 W. I. トマスの公理 = 「状況の規定」の意味内容

自然現象と社会現象との相違に注目して、社会科学に固有の方法論を追求したのは W. I. トマスである。W. I. トマスによると、「社会的事実」は、それに関与する個人や集団に対して同一の意味を付与するものではないから、物理学とのアナロジーで社会学を構築することはできない。人間行動は、実在すると人が信じることに基づいて生起する。つまり人は、実在すると思っている時には (たとえ客観的には存在

しなくとも) 実在するかのごとくに行動する、ということこそが、人間の社会生活にとっては決定的に重要な事実である。行動の前提となる意思決定の前には、人が自らの置かれている状況をどう解釈するかという状況に対する視点、すなわち、『状況の規定』が先行しなければならない』(W. I. トマス、1951、pp.1-32)。

3-1 トマスの公理

W. I. トマスが重視した状況の主観的な定義づけ、すなわち「もしひとが状況を真実であると決めれば、その状況は結果においても真実である」という命題を「トマスの公理」と呼んでいる(W. I. トマス、同上)。英語では If men define the situations as real, they are real in their consequences. と表現されている。トマスの公理の重要性は、状況は解釈者と切り離されて客観的に存在するものではないことを見抜いた点にある。これこそが社会現象に固有の諸事実、ユニークな特性である、とトマスは主張したのである。

3-2 トマスの公理の前半の主題

まず、トマスの公理の前半、すなわち「もし人が状況を真実であると決めれば」という条件節で示された部分の主題について考えてみよう。この部分は、人間は単に状況の客観的な特徴に反応するだけではなく、自分たちにとってこの状況がもつ意味に対しても反応するということを強調している。状況がもつ意味に対する反応の方が状況の客観的な特徴に対する反応よりも時として重要である。どういう意味を付与するかによって、状況に対する反応が異なってくるからである。つまり前半の主題は、「意味付与が実在に対しておよぼす反作用」を強調しているといっていよい。トマスの公理は「状況の規定(定義)」と呼ばれているが、ここで一つの疑問が生じてくる。それは意味付与の仕方は決められたものではなく、人によって多様である。したがって、同じ状況が人によって多様に見えるということになるが、通常では誰にとっても同じ状況に見える場合の方が多い。これは何故だろうか。その理由は、人間の実在への意味付与の仕方が社会的にパターン化されているためである。

3-3 トマスの公理の後半の主題

次に、トマスの公理の後半、すなわち「その状況は結果においても真実である」という主節の部分の主題は何だろうか。この部分は、ひとたび人びとが何らかの意味をその時の状況に付与すると、それに続いてなされる行為やその行為の結果は、この付与された意味によって規定されることを表している。後半の主題は「状況の定義がそれに続く状況を作り出す」ことを強調している。

この命題の面白さは素朴なりアリズムを否定している点にある。発想の起源は

2,500年以上も前にギリシャのソポクレスが劇化したギリシャ悲劇の名作『オイデイプス王』(ソポクレス/藤沢令夫 訳、1967)にまで遡ることができる。日本では江戸時代の元禄年間に活躍した人形浄瑠璃の脚本家である近松門左衛門の「虚実皮膜(ひにく)論」という考え方がこの発想を継承している。文芸の世界は虚構の世界であるが、その虚構をつうじて真実が描き出される。それほど真実と虚構の境目は薄いという近松の文学観がそれである。この考え方は、社会的現実にも当てはまる。誤った予言であっても、人びとがそれを正しい予言と信じると、その予言が真実のものになってしまうことがあるからである。

4 R. マートンによる「予言の自己成就」の定式化

4-1 社会的な状況において誤った予言が実現される【=予言の自己成就】

R. マートンはこの W. I. トマスの公理を「予言の自己成就」として定式化した。マートンが定式化した予言の自己成就とは、「ある状況が起こりそうだと考えて人びとが行為すると、そう思わなければ起こらなかったはずの状況が実際に実現してしまう事態」と定義されている。つまり、「最初の誤った状況の規定が新しい行動を呼び起こし、その行動が当初の誤った考えを真実なものとする事」(R. マートン、1961、pp.384-385)である。ここでいう「予言」とは状況の規定を公表すること、すなわち一定の状況に対する認識(イメージ)を表明することである。そして「状況」は個人的な状況もあれば社会的な状況もある。

個人的な状況における予言の自己成就とは、簡単にいえば、自己暗示がプラスあるいはマイナスに作用する場合を考えればよい。たとえば、オリンピック選手たちのイメージ・トレーニングが自己暗示をプラスに働かせる事例である。マイナスに働く事例は試験に失敗する受験生(受験ノイローゼ)がその典型であろう。

社会学が関心をもっているのは言うまでもなく社会的な状況における予言の自己成就である。たとえば社会的に大きな被害を生み出した事例としては、流言飛語の伝搬による暴動や社会不安、差別の発生など枚挙にいとまがない。1923年の関東大震災の際に起こった「朝鮮人の虐殺事件」、帝都復興のために乱発した震災手形が数年後に不良債権化し、時の大蔵大臣が予算委員会の席で不用意な発言をしたことがきっかけとなって発生した「1927年の金融恐慌」、20世紀の初頭にアメリカで頻繁に起こった「労働組合からの黒人(アフリカ系アメリカ人)の排斥運動」などが代表的な事例として挙げられるだろう。

4-2 社会的な状況において正しい予言が破壊される【=予言の自己破壊】

予言の自己成就とは正反対の社会現象も存在する。すなわち、「将来の社会的状況に関する見通しを陳述した言明が、その将来状態に関する関係主体に影響し、行

為主体の行動様式を変化させることによって、結果的に当の言明が裏切られていく現象」(R. マートン、1936、pp.894-904) のことである。つまり予言が自滅する場合である。このように正しい予言であっても、予言が立てられたことによって、予言が外れてしまう現象をマートンは「予言の自己破壊」あるいは「自己破壊的予言」と呼んでいる (R. マートン、同上)。すなわち、マートンは、ポパーの「エディプス効果」を自己成就的予言と自己破壊的予言に大きく二分して把握したことになる。自己破壊的予言の代表的な事例としては、穴場情報、アナウンス効果と呼ばれる社会現象、マルクスの教説などを指摘できる。

4-3 主観的意図と行為の客観的結果のズレから生じる意図せざる結果【=潜在的機能】

意図的な社会的行為がその意図や目的を裏切り、予想もしなかった影響をおよぼすことがある。マートンは、主観的な意図と行為の客観的結果のズレによって生じる「意図せざる結果」を、「潜在的機能」の概念によって定式化した (R. マートン/森東吾他 訳、1961、pp.16-77)。潜在的機能の代表的な事例は、マックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のなかで分析した歴史上の壮大なパラドックスである。

禁欲的プロテスタンティズムの教義にしたがって生活するとき、どのような結果が生じるだろうか。質素儉約と勤勉な労働態度 (両者をあわせて現世内禁欲と呼ぶ) とがあいまって富の蓄積をもたらす。プロテスタンティズムは職業召命説という形で、それまで卑賤視されてきた金銭の獲得を主目的とする手工業者や商人に天国の門を開き、彼らの熱心な信仰を集めた。彼らにとっては、現世内禁欲に励むことが心の救済を確信できる唯一の道だったのである。このことは大きな歴史的意義をもっていた。禁欲的プロテスタンティズムは資本が自己増殖するメカニズムを生み出し、独立自営の職人や商人をしだいに「資本家階級」へと変貌させていった。だが、禁欲的プロテスタンティズムの信徒たちは、社会を資本主義的に改造することを目的として現世内禁欲に励んだわけではない。ただ魂の救済を目的として現世内禁欲に励んだにすぎない。現世内禁欲は、彼らの主観的な意味づけとは別に、いわば歴史上の副産物として資本の蓄積をもたらし、西欧においてはじめて資本主義的経済システムを成立させたのである。しかし、皮肉なことに近代の資本主義が発展するにつれて、当初の目的であった魂の救済のための禁欲主義は、初期の信徒たちの意図に反して衰退していくことになった。(M. ウェーバー/大塚久雄 訳、1988)

5 金丸由雄による予言の諸類型

5-1 予言の自己成就を区分する視点：「1人系か複数系か」と「1回系か循環系か」

マートンが定式化した予言の自己成就の諸類型を考える上でユニークなアイデアを提起したのは金丸由雄である。金丸は、「予期、行動、結果」という論文のなかで、自己回帰型の因果連鎖における参加者の役割分化、すなわち誰が予言をして、誰がその予言に基づく行動をするのか、そして誰がその結果を受けとるのか、という視点から、自己成就的予言と自己破壊的予言を「1人系か複数系か」に区分している(金丸、1970、pp.2-19)。

金丸が主張する1人系とは、「個人であれ集団であれ、単独の行為主体が自ら予言し、自分でその予言に基づく行動をし、自分でその結果を受けとるというケース」(金丸、同上)である。したがって、予言内容は自分に関するものであり、自分自身との相互作用の積み重ねのなかで事態が推移していく。試験ノイローゼがその具体例である。それに対して2人以上の複数系とは、「予期→行動→結果」という自己回帰型の因果連鎖が2つ以上の主体によって担われるケースである(金丸、同上)。この典型は、穴場情報を信じて人びとが殺到した結果、もはやそこが穴場ではなくなるといった事態である。

さらに金丸は、「予期→行動→結果」の因果連鎖の回数にも注目している。回数に注目すると、予言の自己成就は「1回系か循環系か」に区分することができる(金丸、同上)。1回系は前述した試験ノイローゼや銀行の取り付け騒ぎのように1回の因果連鎖で完了する。それに対して循環系は、結果が予言を強化するという形で何度も循環する可能性(と危険性)を有している。偏見と差別の構造がしだいに

表1 予言の諸類型

self-destroying prophecy (自己破壊的予言)	
1人1回系	寓話のウサギ、前評判の高いチーム
複数1回系	株価予測、マルクスの教説、小麦の生産量予測
self-fulfilling prophecy (自己成就的予言)	
1人1回系	なせば成る 試験ノイローゼ
1人循環系	病は気から、心身症
複数1回系	戦争は不可避、取り付け騒ぎ
複数循環系	人種差別、部落差別

(出典：徳岡秀雄『社会病理の分析視角』東京大学出版会、1987、p.13より転載)

強化されていくプロセスは循環系の典型的な事例である。「1回系か循環系か」といった区分は、予言の自己成就のプロセスにだけ有効である。逆に、予言の自己破壊のプロセスでは予言が的中しないため、当初の予言が結果によってさらに強化されるという事態は起こらない。徳岡 (1987, p.13) は、以上の議論を整理して、社会現象における予言を表1のように類型化している。

5-2 予言の自己成就の類型別事例

①【1人1回系の予言の自己成就】：試験ノイローゼ

誰しも受験勉強のストレスで押しつぶされそうになっているときに経験があることだと思うが、ひとたび試験に落ちるのではないかという不安心理にかられると、いざ本番の時に自分の実力を発揮できなくなることがある。そうすると、合格するだけの力をもっていても、時間配分を間違えたり焦る気持ちがこうじて落ち着いて問題を解くことができず、結果的に試験に落ちてしまうことがある。不安を抱いたことで試験に失敗したとすれば、誤った予言が本人の行動を通じて実現されたことになる。

②【1人循環系の予言の自己成就】：ピグマリオン効果 (=教師期待効果)

逆に良い結果をもたらす予言の自己成就もある。その一つが「ピグマリオン効果」と呼ばれる現象である。ピグマリオン効果とは、教師が生徒の長所を見抜きその点に光をあて称賛することで生徒に自信をもたせる。そうすることで生徒のやる気スイッチを入れ、自発的にその科目に取り組む動機づけを与える。すると、生徒の成績も次第に上がり、周囲からも一目置かれる存在になる。教師期待効果ともいう。この効果の注目すべき点はその波及効果にある。人間は一つのこと自信をもつと、それまでは欠点とみられていた特性が、次第にその人の長所に転じるという効果をもたらすことがある。こうした現象も「自己成就的予言」の典型である。この命題のポイントは、社会現象が実現するか否かは「認識」と「行為」の間の因果連鎖で決まるのであって、自然現象のように「予言の真偽」ではないという点にある。教師の生徒に対する認識（この場合は期待や評価）が誤っていても問題はない。人間の行為は状況に対する反応として生じるが、その状況に対してどのような「主観的な意味づけ」をするかが重要となる。

③【複数1回系の予言の自己成就】：豊川信用金庫の取り付け騒ぎ

自己イメージを形成しているのは、個人だけではなく組織や社会もそうである。個人が自分のまなざしと他人のまなざしを通じて自己イメージを確立するように、組織や社会も内部のまなざしと外部のまなざしを通じて自己イメージを確立している。銀行にとってもっとも大事なものは社会的な信用である。愛知県豊川市に本店を置く豊川信用金庫（以下、豊信と略記する）の場合も、「豊信は信用できる」という自己イメージを維持することによって経営が成り立っていた。こうした自己イメー

ジが維持されているかぎり、人びとは安心してお金を預けられるし、豊信はそのお金をもとにして事業を展開することができた。そして事業に成功すれば、「豊信は信用できる」というイメージはますます確かなものとなる(正村、2017、p.75)。

だが、このような「イメージ」→「行為」→「結果」の循環が「悪循環」に変わると、豊信の経営は一気に悪化してしまう。1973年12月13日、豊信の小坂井支店で発生した取り付け騒ぎの原因は、「豊信はあぶない」あるいは「つぶれる」という事実無根の噂であった。このデマのために、多くの預金者が小坂井支店をはじめ本店や他の八支店に押しかけ、14日にはパニック状態になった。マスコミのキャンペーン、日銀・大蔵省・警察などの懸命の努力によって、15日からパニックは鎮静化に向かった。

この事例からもわかるように、ひとたび「〇〇銀行はあぶないというイメージ」が付与されると、このイメージは、〇〇銀行から「預金を引き出す行為」を促すように作用する。人びとが〇〇銀行から預金を引き出せば、「〇〇銀行が倒産する可能性は高まる」ために、このイメージが強化される。こうして銀行の「自己イメージ」と預金を引き出す「行為」とのフィードバックを通じて、結果的にその銀行は「倒産する」のである(同上、p.76)。

④【複数1回系の予言の自己成就】：二国間の戦争は不可避

同様に、複数1回系の事例として、R. マートンは二国間の戦争の不可避という事例を挙げている。R. マートン(1961)によると「二国間の戦争は不可避であるとの確信にそそのかされ、相互の感情が疎隔し、互いに相手の攻撃的動きに不安を抱いて軍備を拡張することによって、一触即発の危機が作り出される。その結果、戦争の勃発という予想通りの結果をもたらす」(384頁)と。この事例のプロセスも1回の因果連鎖で完了するタイプである。

⑤【複数循環系の予言の自己成就】：黒人の労働組合からの排斥運動

このタイプについてもR. マートン(1961)が紹介している有名な事例を挙げておこう。それは、黒人は「労働者階級の裏切り者」という白人側の信念に基づいた組合からの排斥運動についてである。「黒人はスト破りでも平気でやる労働者階級の裏切り者である、とする白人の信念は、黒人を組合主義になじまない性癖をもつ者だとして組合から排除させることになる。組合から締め出され、仕事の機会を奪われた多くの黒人たちは、白人労働者のストライキで身動きができない経営者の申し出を受け入れ、スト破りをしてでも仕事にありつかねばならなくなる。黒人のスト破りという冷徹な事実を目の当たりにした多くの白人は、当初の信念をますます確認し、黒人を労働組合から排斥する政策を強く支持することになる」(同上、p.385)。

このタイプの因果連鎖は、結果が予言を強化するという形で何度も循環する可能性を有している。重要な点は、このような「偏見と差別の構造」は、際限なく肥大化していく危険性をもっている、という事実である。我が国で起こった水俣病患者

やらい病（ハンセン氏病）患者に対する根深い偏見と差別の実態がこのことを証明している。

5-3 予言の自己破壊の類型別事例

自己破壊的予言の代表的な事例としては、穴場情報、アナウンス効果、株価予測、マルクスの教説などを指摘できる。前述したように予言の自己破壊は1回系のみで循環系は存在しない。

①【1人1回系の予言の自己破壊】：アナウンス効果

「アナウンス効果」とは、選挙結果の予想がもたらす影響に言及するときにしばしば使われる社会現象である。たとえば、国政レベルの選挙が近づくと、全国紙が投票日の一、二か月前からこぞって選挙予想を行う。こうした事前の選挙予想は決してデタラメではない。統計的な手順にしたがって、ある一定の誤差の範囲で母数を精確に推定した結果なのである。つまりは、状況に対する「正しい予言」といってよい。すると投票日当日にどんなことが起こるだろうか。予言内容が正しいのだから、予想通りの結果が実現すると考えるのは短絡的である。なぜなら、選挙活動に従事している関係主体が「予言破りの自由を行使する」からである。当選の可能性を予想された陣営には必ず油断が生じるだろうし、当選が危ういと予想された対立陣営は必死になって組織の引き締めを行って巻き返しをはかるだろう。そして、有権者のかなりの割合を占める浮動層が予想外の行動を取ることも多い。その結果、投票日には予想を覆す意外な結果が起こることが少なくない。アナウンス効果は、正しい予言であっても、予言が立てられたことによってその予言が外れてしまう典型的なパラドックスといえるだろう。

②【複数1回系の予言の自己破壊】：マルクスの教説

徳岡（1987）は、このタイプの予言の自己成就の事例として、マルクスの教説が予言した事態を指摘している。すなわち、「富が一部の資本家にますます集中する一方で、一般大衆の絶対的窮乏化が深刻化するというマルクスの予言は、予言された過程そのものに影響をおよぼした。19世紀におけるマルクスの教説の少なくとも一つの結果として、労働者階級の組織化が普及し、労働者は個人的な契約では不利な立場に置かれることを自覚し、団体交渉の利点を活用するようになった。かくしてマルクスが予言した事態の展開は、除去されないまでも送られることになった」（pp.10-11）と。

6 社会的世界では「予言の自己成就」がどのようにして起こるのか？

6-1 ① 自己イメージを導くポジティブ・フィードバック

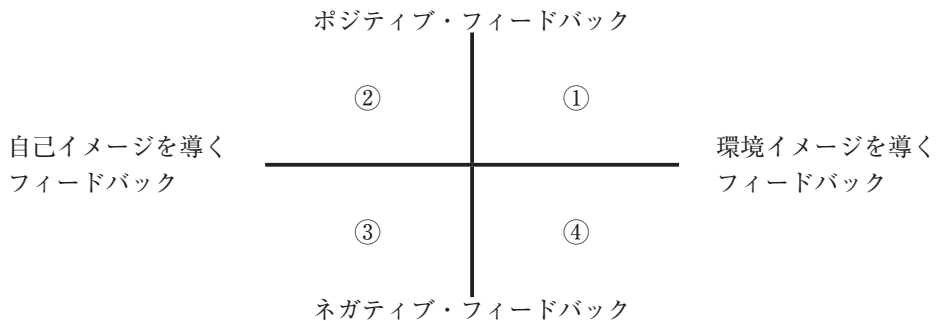
社会的世界は、認識と行為という人間の営みを通じて形成されている。人間は一

定の状況に対する認識に基づいて行為をし、そうした行為の結果はふたたび認識される。そして、その認識に基づいて新たな行為がなされる。このように、認識と行為の間には、フィードバック³⁾と呼ばれる循環が働いている。フィードバックには、一定の状態を保つように作用する「ネガティブ・フィードバック」と、その反対に認識と行為が繰り返されるなかで最初の状態からどんどん離れていって新しい状態を作り出す「ポジティブ・フィードバック」がある(正村、2017、p.72)。

さらに、人間にとって認識の対象となるのは環境ばかりではない。自分自身も認識の対象になる。自分自身を意識することができる点に人間の大きな特徴がある。そのため、人間の場合には、「環境を認識するようなフィードバック」が働くだけでなく、「自己を認識するようなフィードバック」も働いている(同上、p.73)。自分がどのような行為をするかは、その人が抱いている自己イメージに左右されるし、自己イメージは自分が行っている行為によって左右される。たとえば、自動車を運転する場合を考えてみれば容易に理解できるはずである。自分が運転するという「行為」とドライバーとしての「自己イメージ」の間に働くフィードバックについてである。

「状況というのは、『いま、ここ』における環境と自分とのかかわりとして成立するので、状況に対する認識には、環境に対する認識(環境イメージ)と自分自身に対する認識(自己イメージ)という2つの側面が含まれている。それゆえ、状況認識に基づいて行為し、その行為を通じて生まれた状態(結果)を認識するというフィードバックは、認識のあり方に応じて、『環境イメージを導くフィードバック』と『自己イメージを導くフィードバック』の2つに分けられることになる」(正村、2017、p.74)。

図 I フィードバックの4類型(正村俊之、2017、p.74より転載)



ここで理解を深めるために「銀行の取り付け騒ぎ」の事例を取り上げてみよう。

- 1) 人びとは「銀行が倒産するかもしれない」という誤った噂を信じた【認識A】
→ 2) へ
- 2) 噂を信じた人びとは銀行から預金を引き出す【行為A】→ 3) へ
- 3) それによって銀行の倒産の可能性が高まる【認識B】→ 4) へ
- 4) それで人びとはますます銀行から預金を引き出す【行為B】→ 5) へ
- 5) そうなると倒産の可能性がいっそう高まる【認識C】→ 【行為C】→ 【倒産】
(結果)

この場合は、一定の予言(状況に対する認識)に基づいて行われた【行為A】の結果は、予言の信ぴょう性を高めている【認識B】。信ぴょう性を増した予言に基づいて【行為B】がいっそう促進される。行為の結果がふたたび原因となって【認識C】を強化し、さらなる【行為C】が導かれる。このプロセスのなかでは、次々に結果を拡大再生産するというフィードバックが起こっている。このプロセスの特徴は、「銀行が倒産するかもしれない」という予言が、自分の個人的な状況に対する認識であるとともに、自己イメージにもなっている点である。「銀行が倒産するかもしれない」という自己イメージが、人びとが預金を引き出すという行為を促し、倒産するという可能性をどんどん増幅させているので、「自己イメージ」と「行為」と倒産という「結果」の間には、【ポジティブ・フィードバック】が働いている。個人が自分のまなざしと他者のまなざしを通じて自己イメージを確立するように、組織や社会も、内部のまなざしと外部のまなざしを通じて自己イメージを確立するのである。

6-2 ② 意図せざる結果

予言の自己成達は、結果をどんどん増幅させるようなポジティブ・フィードバックの過程をなしている。その際人びとは、予言された結果を実現させようと意図して実現させたのではない。たとえば、消費者たちはトイレットペーパーを不足させるために買い占めに走ったのではないし、また預金者たちも銀行を倒産させるために銀行から預金を引き出したのでもない。消費者や預金者は、予言を信じて行動したばかりに、そのような意図してもいかなかった事態を惹き起こしてしまったのである。すなわち、消費者にとってトイレットペーパーが不足したことは、また、預金者が銀行を倒産に追い込んだことは、あくまでも「意図せざる結果」なのである。人間は自分を取り巻く状況を認識しながら行為しているが、とくに社会的行為をおこなう過程では、自分の行為は他人の行為との複雑な関連のもとに置かれているので、誰であっても行為の結果を完全に見通すことはできない。そのために、意図的におこなった行為が「意図せざる結果」(R. マートン、1936、pp.894-904)を招くことになる。

6-3 ③ 虚偽の真実への移行

意図せざる結果をともないながら、自己イメージを導くようなポジティブ・フィードバックが作用すると、予言が誤っていたにもかかわらず、最終的にはその予言どおりの結果が生じてしまう。社会的現実の形成は、つねに人間の認識活動に媒介されているために、予言として立てられた「認識」は、人びとの「行為」に影響を与えることによって、「社会的現実」を変えてしまう可能性をはらんでいる。そのために、社会的世界においては、「虚偽と真実の関係が流動的」(正村、2017、p.78)になるのである。

以上の考察から、「予言の自己成就」という社会現象は、①ポジティブ・フィードバック、②意図せざる結果、③虚偽の真実への移行(虚偽と真実の関係が流動的)という3つの特徴をもっていることが明らかになった。マートンが予言の自己成就と呼んだ現象は、これら3つの側面が組み合わさって起こった現象と考えることができる。

7 どのような場合に予言が影響をおよぼすのか？

自己成就的予言や自己破壊的予言といった区分は、あくまでも結果から判断した類型化に過ぎず、予言自体に自己成就あるいは自己破壊となるような固有の性質が内包されているわけではない。重要な課題は、「予言がどのような場合に予言された事象に影響を与えるのか、その程度や方向、その全過程を解明することであろう。いわば、予言の効果を確実に予言すること」(徳岡、1987、p.14)である。

いうまでもないことだが、予言の効果が生じるためには、行為者が予言内容を受け入れて行動することが必要である。予言内容の実現を願うにしろ、予言内容に反発してその実現を阻止するにせよ、行為者が予言にもとづく行動を取らないかぎり、予言の効果は発生しない。予言を無視していた場合には、たとえ結果が予言通りになったとしても、それは偶然の一致であって予言の結果とはいえない。そこでここでは、どのような場合に予言が影響をおよぼすのか、①予言者、②予言内容、③行為者の属性、④予言者や行為者をとりまく社会状況の順に検討してみよう。

7-1 ① 予言者

どのような予言者が行為者に影響をおよぼすのだろうか。予言者はたとえ全幅の信頼を得ていなくても、行為者からその予言を無視されるような存在ではなく、行為者の行動を誘発できさえすればよい。つまり、「相手の意向に関係なく自分の意志を貫徹できる『勢力』をもつ人」(徳岡 1987 : p.15)である。フレンチとレーヴンは、その勢力の中でも特に重要なものとして、報酬勢力、強制勢力、正当勢力、参照勢力、エキスパート勢力の5つを挙げている(1962 : pp.193-217)。この種の勢力

をもつ「重要な他者」「意味ある他者」の具体例は、親、教師、上司、医者などが挙げられるが、もちろん個人には限られない。未組織集団から組織体までを含めたあらゆる集団が予言者となりうる。流言飛語、マス・パニックにおける群衆や一般大衆の予言、差別問題におけるマジョリティ・グループの予言、政府など行政機関による将来予測などの影響は大きい。情報化社会といわれる今日、マス・メディアによる状況の規定は甚大な影響をおよぼす。

7-2 ② 予言内容

オルポートとポストマンは、流言の発生量は、その内容の曖昧さ (ambiguity) と重要性 (importance) の積である $[R=f(a \times i)]$ と定式化した。不確実ではあるが実現可能性がある、と思われる程度の妥当性をもつ予言内容の場合には、行為者はその予言を受け入れるという (同上、1952、p.53)。予言内容が行為者にとって都合の良いものであれ悪いものであれ、重要なかわりをもつものであれば、行為者はその種の予言に無関心ではいられない。日常生活にとってきわめて重要なかわりをもつ内容の予言や自分の将来や健康に関する情報には、関心も大きくなる。特に、銀行の倒産のうわさなどは、預金者にとって最大の関心事であろう。

7-3 ③ 行為者

行為者の属性については「批判的能力」の程度や有無が決定的に重要になる。キャントリルは、1938年10月30日にコロンビア放送局が放送した『火星からの侵入』(H. G. ウェルズ作、ハワード・コック翻案による『宇宙戦争』をオーソン・ウェルズとマーキュリー放送劇場の俳優たちが演じた) というラジオ・ドラマが引き起こした全米の規模のパニックを分析して、この混乱のなかで、逃げまどう群に身を投じさせるか否かを分けた決定的要因は、他の局にダイヤルを合わせて、他の曲でも火星人の侵入を伝えているかどうかを確認する態度の有無、すなわち「『批判的能力』こそがパニック的反応に関連する最も重要な唯一の心理学的変数である」(キャントリル、1971、p.93) と主張している。

徳岡は、批判能力に関連する指標として「公式教育の年数や経済的地位」を、批判能力の作動を妨げるパーソナリティ特性として「暗示に対する感受性」を指摘している (1987、p.19)。そして、批判能力のある人とは自分自身の判断基準をもって人だという。反対に、暗示への感受性が強く予言を受け入れやすい人として、キャントリルは「自分自身の判断基準をもたない人、アノミー的心理 (アノミア) 状態にある時やその傾向の強い人、不安や恐怖を抱いている人、権威に弱い人、自信のない人、宿命論にコミットしている人」(1971、pp.155-167) を挙げている。さらに比較文化の視点から判断すると、「恥の文化が支配的で、世間体や他者の視線を気にし、過同調的、他人指向的な社会的性格をもった国民」も、予言を受け入れ

やすい傾向を有していると考えられることができる。

7-4 ④ 予言者と行為者を取りまく社会状況

予言が効果をおよぼすには、「状況の規定」を許すようなあいまいな社会的背景がなければならない。徳岡 (1987, p.20) は、「既存の制度的行動が役立たないアノミー状態にある時代や場所においては、社会不安が蔓延し、人々は自己の判断に自信をもてないがゆえに、明確に状況を規定する予言が受け入れられやすい」と主張している。たとえば、『火星からの侵入』の放送は、1938年というヨーロッパでの開戦の危機の直前に行われたし、日本でも1973年の第1次オイルショック後の経済や生活の危機感を背景にして、トイレットペーパー・パニック、買いだめパニック、豊川信用金庫の取り付け騒ぎが発生している。

アノミー的な社会状況とは「確立した既存の社会構造や階級が崩壊し、社会規範が行動の規制をもたなくなった状況」のことである。こうしたアノミー的社会状況においてこそ、他者による「状況の規定」が大きな意味をもってくる。こう見てくると、社会状況の影響は極めて大きいといわざるを得ない。「状況の規定」を許容するようなアノミー的社会状況こそが、予言の効果を高めているのである。

8 リスク社会のゆらぎ——バーチャル・リアリティと予言の自己成就との関係

最後に、これまでの考察から明らかとなった情報化社会の諸問題について簡単に指摘しておきたい。

1) 個人と個人をつなぐサイバースペースは多種多様である。交流サイトや交流ツールは「ソーシャルメディア」(social media) と総称されているが、ソーシャルメディアを利用することで、人びとは国境を超えて自由にコミュニケーションをとることができ、ソーシャルメディアを通じて他人や社会に影響をおよぼすことができる。人びとの考えを変化させ、行動を誘導し、人びとつなぐ交流ツールとして、その影響力はますます増大するだろう。劉 (2019, 「情報科学」第6回講義資料) によると、ソーシャルメディアのメリットとしては、①人と人の情報的関係の普遍化、②社会で流通する情報の均質化、③情報の非対称性の減少、④社会平等の推進などが指摘できるが、その反面で、①偏った考えの拡散、②過剰結合による過剰反応 (ある事件や出来事に対して過敏・過剰反応)、③情報による社会の不安定化といったつながりの影の側面も指摘されている。新聞や放送が権力から独立したメディアとして育つ前に、スマホを手に入れた途上国の人びとにとって、ソーシャルメディアは時に破壊的な影響力をもつことが指摘されている。

2) ほんの10年ほど前まで、SNSは民主主義を後押しする存在として肯定的なイメージでとらえられていた。2011年に「アラブの春」と呼ばれる中東の動乱が起こった。発端のとなった北アフリカのチュニジアで23年間続いたベンアリ政権を倒したのは、燎原の火のように広がった抗議デモだった。抗議デモの情報の流通を可能にして人びとを結束させたのはソーシャルメディアだった。

ところが、それから10年もたたないうちに、ソーシャルメディアは光よりも影の部分がクローズアップされるようになっていく。「デマやフェイクニュースを拡散させ、社会の分断を誘発し、関心のある情報や似たような考えにしか触れられなくなるフィルターバブルやエコーチェンバーを生み出す存在として。そして、ソーシャルメディア上で収集される大量のデータは私たちの政治志向を分析し、個々人の考えにつけ込むかのような広告やプロパガンダを狙い撃ちして送りつけるのに使われている。さらにソーシャルメディアは海外からの選挙干渉すら招いている」(NHK取材班、2022、pp.214-215)。これらの要素は、民主主義の根幹をなす投票行動に影響を与え、選挙結果を歪める元凶になりかねない⁴⁾。

ソーシャルメディアなどを通じて収集されたデータが私たちの利益に反する形で利用されるのを食い止めることは容易ではない。有権者の政治志向を分析し、マイクロターゲティングを使う手法⁵⁾は強化されこそすれ、鈍化することはない。

3) 予言の自己成就是、①ポジティブ・フィードバック、②意図せざる結果、③虚偽の真実への移行(虚偽と真実の関係が流動的)という3つの特徴をもっていることが明らかになった。マートンが「予言の自己成就」と呼んだ現象は、これら3つの側面が組み合わせられて起こった現象である。予言の自己破壊の場合も、「予言」(イメージ)が予言に基づいた「行為」を媒介にして、予言の対象となっている「状況そのもの」を変化させている。こうした認識と行為のフィードバックをつうじて、「意図せざる結果」として予言が破壊されてしまうのである。

確かに予言の自己成就においては誤っていた予言が実現される(→ウソがホントになる)のに対して、予言の自己破壊においては正しかった予言が破壊される(→ホントがウソになる)といった正反対の結果が生じている。だが、「真実と虚偽が流動的であるという点では、2つの現象は紙一重の関係にある。予言の自己成就と自己破壊は、正反対の効果を及ぼすとはいえず、共通のメカニズムに従っている」(友枝、2017、p.79)。

どちらの場合も、社会現象が実現するか否かは「予言の真偽」とは無関係である。結果だけをみれば、自己成就的予言と自己破壊的予言は正反対の社会現象だが、ウソがホントになる場合もホントがウソになる場合も、そこには共通して「認識」と「行為」の間に一定のフィードバック(循環)が働いている。

4) 現在、第2世代のバーチャル・リアリティといわれる「複合現実」が現実の世界に急速に拡大してきている。それはリアルな世界と画面の中の仮想の世界の境

界があいまいになり、現実と仮想が交じり合う世界である。私たちは情報の発信・供給側を賢明にコントロールすることができるだろうか。社会的現実のなかでは、「予言」(状況の規定あるいはイメージ)が予言に基づいた「行為」を媒介にして、予言の対象となった「状況そのもの」を変化させてしまう。人間の社会では、こうした認識と行為のフィードバックをつうじて、重大な被害をもたらす危険性を帯びた「意図せざる結果」がたびたび起こっていることを忘れてはならないだろう。

註

- 1) 【拡張現実】(Augmented Reality, AR) ……目の前にある現実の場面にデジタル情報(仮想)を重ね合わせ、その現実性を高める技術のことをいう。
- 2) 【複合現実】(Mixed Reality, MR) ……第2世代のバーチャル・リアリティといわれる。それはリアルな世界と画面の中の仮想の世界の境界があいまいになり、現実と仮想が交じり合う世界である。現実空間を主軸に仮想環境が点在する拡張現実と、現実空間を仮想環境が上書きする拡張仮想(Augmented Virtual, AV)を包含する概念である。
- 3) 【フィードバック】 ……システムのアウトプットがインプットとしてシステムに再投入され、システムの作動に影響すること。このことを行為のレベルで考えると、行為の結果が行為者に認識され、次の行為が適切に制御されることを意味する。これを認識と行為のフィードバックという。フィードバックのうち、最初の状態が維持され続けることをネガティブ・フィードバックといい、最初の状態からしだいに離れていくことをポジティブ・フィードバックという。ポジティブ・フィードバックには、好循環と悪循環がある。
- 4) 【ソーシャルメディアの影の部分】 ……2016年に起きたイギリスのEU離脱を決めた国民投票とトランプ大統領を生み出したアメリカ大統領選挙は、いずれもSNSの影の部分で浮き彫りにしたといわれている。
- 5) 【マイクロターゲティングという手法】 ……Facebookの個人データをAIに解析・学習させ、有権者個々の政治的傾向をかなりの精度で割り出したうえで、個々の有権者にカスタマイズする形で政治広告を制作する。そのようにして作られた政治広告を、SNS上の何千万という有権者のなかから数百という最小単位の人びとに向けて効果的に送りつける方法をいう。

参考文献

- 1) エドガール・モラン (杉山光信 訳) 『オルレ안의うわさ』 みすず書房、1973
- 2) 金丸由雄「予期、行動、結果」『社会学評論』21巻3号、1970
- 3) カール・ポパー (久野収・市井三郎 訳) 『歴史主義の貧困』中央公論社、1961
- 4) カール・ポパー (森博 訳) 『客観的知識—進化論的アプローチ』木鐸社、1974
- 5) 木村邦博他 編著『考える社会学』ミネルヴァ書房、1991

- 6) キヤントリル (齊藤耕二・菊池章夫 訳) 『火星からの侵入』 川島書店、1971
- 7) マックス・ウェーバー (大塚久雄 訳) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 (改訂版) 岩波書店、1988
- 8) NHK 取材班 『AI vs 民主主義——高度化する世論操作の深層——』 NHK 出版新書、2020
- 9) オルポート、ポストマン (南博 訳) 『デマの心理学』 岩波書店、1952
- 10) R. Merton, The Unanticipated Consequences of Purposive Social Action. *American Sociological Review*, 1, 1936: pp.894-904.
- 11) ロバート・マートン (森東吾他 訳) 『社会理論と社会構造』 みすず書房、1961
- 12) 作田啓一・井上俊 編集 『命題コレクション 社会学』 筑摩書房、1986
- 13) 徳岡秀雄 著 『社会病理の分析視角』 東京大学出版会、1987、p.1～p.34.
- 14) 友枝敏雄・正村俊之他 著 『社会学のエッセンス』 (新版補訂版) 有斐閣アルマ、2017、p.67～p.80.
- 15) ソポクレス (藤沢令夫 訳) 『オイディプス王』 岩波文庫、1967
- 16) E. H. Volkart(ed.), *Social Behavior and Personality: Contributions of W. I. Thomas to Theory and Social Research*, New York: Social Science Research Council, 1951, pp.1-32.

謝辞

本文中に劉継生先生の「情報科学」第6回講義資料を引用させていただいた。参考文献には明記しなかったが、改めて感謝の意を表する次第である。